様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０９５２

研究課題名（和文）東シナ海漁民の移動と海域認識の人類学―植民地・境界変動・民族集団関係

研究課題名（英文）Anthropological study of the migration and the recognition of sea area among the East China Sea fishermen

研究代表者
西村　一之（NISHIMURA, KAZUYUKI）

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：７０３２８８８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東シナ海域を移動する漁民に着目した人類学的研究である。台湾東海岸にある一港町を主要な調査地とし、この町を往来する漁民について、人類学的臨地調査と文献調査を行った。東アジアの国際関係や政治経済の影響を受け、この海域に現れ変動してきた境界（国境）に応じて生活してきた台湾、沖縄、中国の漁民の姿を具体的に明らかとした。彼らは移動を通して、漁民としての同一性を形成する共に、強弱を繰り返す境界によってその移動が拘束されている。東シナ海域は、漁民たちにとって個別的な経験の束で満ちた場所であると同時に国家が考える空間でもあり、この二つがせめぎあっているのである。

研究成果の概要（英文）：This study is the anthropological study that paid its attention to fishermen moving East China Sea. I did my fieldwork on the port town in the Taiwanese East Coast as a main investigation place. And I did anthropological fieldwork and also documents investigation to the fishermen who came and went in this town. I concretely revealed the figure of fishermen who lived in Taiwan, Okinawa and South China, was affected to international relations and political economy of the East Asia. Fishermen of the East China Sea dealt with the power of border and made their everyday life. By an experience of migration, they made their identity as ‘fishermen’ each other. But also, their migration was restricted by the power of border which repeated the strength and weakness. The East China Sea is the ‘place’ where full of fishermen’s individual experience of migration and fishing, and also is the ‘space’ defined by nation.

研究分野：文化人類学

キーワード：移動　海域　漁民　台湾　中国福建

１．研究開始当初の背景

本研究は、人とモノそして特に技術の移動に着目した東シナ海漁民についての文化人類学的研究である。これと関連する研究として、その移動が広く速くそして大量に動く様を強調したグローバリズムに対する人文社会学研究がある。そこでは、新自由主義に代表される人々の生を規定する価値観が世界を席巻し、遠く離れた個々のローカルに生きる人々の生活を同じ方向に向かわせ拘束する点が指摘された。一方、こうした大きな力を前に、地域社会における新しい価値観を生み出す様が描出される、グローカリズム研究へと展開が進んでもいる。また、人々の双方的で頻繁な移動を前に国境の存在が希薄化する現象に注目し、移動する人々が複数のアイデンティティを持ちまたそれを状況に合わせて操作し改変していく点を強調したトランスナショナリズム研究がある。対して、本研究が対象とした東シナ海域においては、その移動は比較的に近接した地域間の動きとなる。さらに先のトランスナショナリズム研究については、移動をもたらす大きな権力（国家や国際関係上のヘゲモニーなど）をややもすると軽視し、また移動する主体を無批判に称揚する傾向が指摘されているが（田辺 2008）、東シナ海域では、戦前は日本帝国主義が拡張し、これが終焉を迎えて続く戦後は米ソ対立に起因する冷戦体制の構造化とその崩壊、そして国連海洋法条約締結国による排他的経済水域の画定という国際社会の変革の影響を直接的に受け、そこから発揮される力によって境界が生まれ変質し現在もその動きが絶え間なく続いている。その過程は人やモノの移動を大きく左右してきた。本研究ではこうした大きなうねりを視野に入れ、この海域を生活の場として利用し頻繁に移動して生きてきた人々、特に漁民の姿に着目し接近することを目指した。

２．研究の目的

本研究は、台湾、沖縄、中国南部に囲まれた東シナ海域を利用して生きる漁民の移動に着目した人類学的研究である。そこから、国際関係や政治経済の影響を受けてこの海域に現れ変動してきた境界に応じて日常を構築してきた漁民の姿を明らかとし、国民国家の存在を所与としない形で結ばれている東シナ海漁民の存在について調査分析することを目的としている。この時、ポストモダン地理学が取り上げた「空間と場所の緊張」（山﨑 2010）を参考とした。これは、近代的合理的利用が促される「空間」と歴史的固有性や主観的非代替性を持つ「場所」との緊張を指した言葉である。台湾東海岸と沖縄先島の間の東シナ海域は、台湾漁民と沖縄漁民が行き交い、経験的に抱く思いに満ち、国境が生まれ変動する中で、双方が漁撈活動を行ってきた。また、そこは中国福建省沿岸部とも囲まれその地の漁民も利用してきた海域でもある。彼らは時に互いの地域に移動あるいは移住し日常レベルの接触がされている。これらの地域で暮らす漁民は、東シナ海海域について経験的に知り、そしてそこでつながる者同士が持つ、この海に対する「かけがえのなさ」を共有している。本研究では、この東シナ海漁民がこの海に対し抱くこのかけがえのなさを、彼らの海域利用（漁撈や交易）の実際と国家によって変動する境界（領海や排他的経済水域）とのせめぎあいから明らかにすることを狙った。この時、特に台湾東海岸を行き交った、日本人、沖縄出身者、台湾漢人、台湾先住民族、中国福建漢族の移動の軌跡から考えることとした。

３．研究の方法

本研究では東シナ海を取り巻く東アジアの各地域にある漁民社会について、それぞれインタビューと参与観察による人類学的臨地調査を実施した。臨地調査では、主要調査地を台湾東海岸の港町に定め、ここを往来する台湾東海岸、沖縄先島、中国福建に暮らす漁民の移動と漁撈活動に特に注目した。また、そこでの調査と合わせ、各送り出し地での調査を実施した。連関する複数地域での臨地調査を通じて、漁民のミクロな日常とこれを取り巻くマクロな政治経済の動向を接合させ捉えることに努めた。また、合わせて漁業調査、水産雑誌、行政文書や民族誌的資料などの文献資料の収集を積極的に行い、ミクロとマクロの接点となる漁民社会の理解をはかった。

４．研究成果

東シナ海域を漁場とする漁民の移動と移住を扱う本課題では、台湾東海岸にある一港町を研究の主たる対象として定め、そこを往来する人々について、人類学的臨地調査及び文献調査を行った。

平成 25 年度においては、台湾東海岸および石垣・与那国でそれぞれ臨地調査を行った。台湾調査は、主要調査地にある港町を戦前から戦後にかけて往来した沖縄漁民について、彼らと漁撈や交易をともにした経験を持つ人々へのインタビュー調査を行った。また、石垣・与那国では、台湾での生活経験や国境領域となった海域での出漁を行ってきた人々に対し、漁業領域における台湾住民との接触交流についてインタビュー調査を実施した。この時、2014 年から発効している日台漁業取り決めに伴う台湾漁船の日本 EEZ 内での操業の影響についても調査した。そこからは、戦後国境海域となっていく東アジアへの出漁の詳細や、この海域に向けられた認識について漁民としての同一性と国民としての差異性の重なりについて理解する手がかり

を得た。

平成 26 年度においては台湾東海岸および中国福建南部を対象とした臨地調査を行った。台湾調査は、1990 年代から次第に増加した中国からの出稼ぎ漁民との漁撈活動や、台湾漁民との接触に伴う社会的包摂と例外化についてインタビューと参与観察による調査を実施した。主として中国と台湾との関係の推移を踏まえ、政治経済の変動を押さえながら、両地域の間を行き来した漁民と彼らの東シナ海漁場の利用に焦点を当てた。中国福建南部では、台湾調査で明らかとなった戦前後の台湾近海への出漁について調査を行った。この時、北は尖閣諸島近くまで出漁しており、台湾北東部の漁港に水揚げをしている。日中戦争の中断を挟んで、戦後再び漁が行われるが、中台関係の緊張から停止する。この間、出漁中に台湾側につかまりその後台湾で暮らすことになった漁民が少なくなかった。また、1990 年代から始まる台湾出稼ぎについて、現在台湾の主要調査地に来ている漁民にインタビューを実施した。日本植民統治、国共の対立、両岸関係の融和といった戦後東シナ海を取り巻くマクロな社会変化が、漁民の活動に大きな影響を与えてきたことが分かった。

平成 27 年度においては、戦前から戦後にかけて調査地に居住し、その後も台湾漁民と重なる海域を利用してきた与那国島の漁民について、また 1990 年代以降強い存在感を示している台湾外から訪れる漁業出稼ぎ者について、それぞれ与那国町と中国福建閩南地方において臨地調査を再び実施した。ここでは、それぞれの土地における漁撈活動、台湾との往来並びにそこで生活したことの影響について調査を行った。また、主要な調査地である台湾東海岸において存在感を増す台湾外出稼ぎ漁民の全般についてインタビュー調査を実施した。

研究期間を通して、台湾東海岸、沖縄先島、中国福建閩南地方にある漁業地を訪れ、台湾の主要調査地を行き来する漁民の移動について、東アジア地域の歴史的変動を踏まえた調査研究を行うことが出来た。また、移動を通した接触を繰り返す中で、漁撈を通した漁民としての同一性の形成が認められると同時に、この地域で繰り返し現れ消えそして強弱する境界（＝国境）によってその移動そして生活が拘束される具体的な姿が明らかとなった。東シナ海域は、彼らにとって漁撈活動を始めとする多様で個別的な移動経験の束で満ちた場所であるが、同時に複数の国家の権力が対峙することによって形成された空間でもあり、双方がせめぎあう様子が、漁民の移動を通して見ることが出来た。そして、複数の文化的背景を持った人々が集まる台湾の漁業地で構築される日常生活は、異なる隣人として互いを認識し合い、同時に差異を理由とした緊張とその原因の相互理解が繰り返し展開されている。さらに国家間の関係が移動する漁民の日常を拘束し、決して脱国境的な動きではないことが明らかとなった。

また、研究の過程で、台湾と中国との間にある基層文化としての閩南文化、特に媽祖信仰に代表される民間信仰が、両地域の漁民の同一性に大きくかかわっていることが確認された。さらに、この海で生きる台湾漁民の下に、インドネシアを始めとする東南アジアからの出稼ぎ漁民の姿が、より強い存在感を占めてきた。今後は彼らの台湾の漁業地における位置づけや、インドネシアでの漁撈との関連について合わせて調査研究する必要が見えてきている。

〈引用文献〉

田辺繁治　「あとがき」西井凉子・田辺繁治編『社会空間の人類学　マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社、2008 年、pp.445-448

山﨑孝史　『政治・空間・場所　「政治の地理学」にむけて』ナカニシヤ出版、2010 年

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）

①西村一之　「台湾東海岸における漁撈技術の文化資源化－植民地経験・移動・境域－」『東アジア近代史』24：17-32、2014 年、査読有

〔学会発表〕（計　3 件）

①西村一之　「台湾東海岸における漁撈技術－植民地経験・移動・境界－」東アジア近代史学会第 18 回研究大会シンポジューム「境界」認識の変容と活用－国境把握をめぐる知識の現在形」（東京都：中央大学）2013 年 6 月 16 日

②西村一之　「漁民になる－台湾東部漁業地への移動と移住－」日本文化人類学会第 47 回研究大会分科会「東アジア・東南アジアにおける漁村形成過程の比較研究」報告（東京都；慶応大学）2013 年 6 月 8 日

③西村一之　「台湾東海岸における「日本」とのつながり－日本化から中華化のなかで－」日本台湾学会第 15 回学術大会分科会「台湾とパラオにおける植民地経験－接触領域にみる「日本」報告（広島県；広島大学）2013 年 5 月 26 日

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者
西村　一之（NISHIMURA, Kazuyuki）
日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：70328883

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし